

Title	ロドリゲス大文典クロフォード家本について
Author(s)	小鹿原, 敏夫
Citation	京都大学國文學論叢 (2011), 25: 1-9
Issue Date	2011-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/141744
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ロドリゲス大文典クロフォード家本について

小鹿原敏夫

(0) はじめに

長崎において出版されたロドリゲス著『日本大文典』(1604)は二部が現存することが知られている。ひとつはオックスフォード大学のボードレイアン図書館蔵本であり、もうひとつはスコットランドのクロフォード伯爵家蔵本である。またこれらの版本に加えて、フランスの東洋学者パジェス(Léon Pagès 1814-86)が、クロフォード伯爵家蔵本(以下クロフォード家本とよぶ)を1864年に二名の書記を使って筆写させた大文典の写本がある(以下パジェス写本とよぶ)。

これら大文典の諸本に関しては、すでに土井忠生博士による書誌解題がある(78-89:土井1982)。さらにボードレイアン図書館蔵本(以下ボードレイアン本とよぶ)に関しては、その影印本に附された三橋健氏の詳しい書誌解説もある(511-518:大文典1976)。

このたび筆者は、幸運にもボードレイアン本とクロフォード家本、そしてパジェス写本のすべてを閲覧する機会が与えられた。本稿ではクロフォード家本に焦点を当て、その伝来と、書入に関する若干の考察を記したい。

(1) 大文典版本二部について

まず大文典のクロフォード家本とボードレイアン本を比較した概要を述べる。

- 両本ともに四折判であるが、クロフォード家本はボードレイアン本よりも少し大きい。表紙においては、前者が縦 24.3cm 横 17cm であり、後者は縦 23.8cm 横 16.7cm である。扉紙においては、どちらも縦は 23cm であるが、横は前者が 16cm で、後者は 15cm である。
- クロフォード家本の装丁は、表紙が花模様を散らした緑色の緞子で包まれて、見返しにも金の下地に花模様の意匠があしらわれている。ボードレイアン本は緑の革表紙でその表面には菱形の浮き彫り模様があり、見返しは大理石の紋様がある。クロフォード家本には背表紙に文字はなく、また小口に金付け装飾はなされていない。ボードレイアン本には金色の背文字があり、小口と天地は金色に塗られている。
- クロフォード家本の遊び紙の一枚目には Crawford の署名とクロフォード家の蔵書票(Bibliotheca Lindesiana)が貼りつけられているが、その他に書入などは全くなく、伝来を特定する手掛かりはまったく見られない。ボードレイアン本には 1810 年の年号を持つラングレス(Langrès)の署名が遊び紙の一枚目にある。

- 本文に関しては、両本ともに全く一致するが、印刷の質はクロフォード家本の方が良い。例えば印刷の際に出来たとみられるボードレイアン本 83v.の大きなインクの染みはクロフォード家本にはみられない。
- クロフォード家本には 39 箇所黒いペン字による書入が本文の余白にみられる。ボードレイアン本の本文には書入が全くみられない。

(2) クロフォード家本の伝来について

土井 (78:1982) にクロフォード家本の伝来に関して以下のような記述がある。

ラングレス蔵書売立目録 (Paris,1825) に挙げてあるのは、絹地の装釘であって、クロフォード家本と一致するので、これもラングレスの手沢本であろう。クロフォード家では一八六三年にロンドンの古書肆 Quaritch を経て購入している。

ラングレス (Louis-Mathieu Langrès 1763-1824) は 18 世紀末から 19 世紀初頭に活躍したフランスの東洋学者で、日本だけでなく、中国、インド、イスラム文化圏を含む東洋学に関する貴重な書籍を多く蒐集していた。没後 1825 年に蔵書売立が行われ、蔵書売立目録 (Langrès 1825) がつくられた。

クロフォード家本巻末の遊び紙には、クォーリッチ (Quaritch) 書店の創業者であったバーナード・クォーリッチ (Bernard Quaritch 1819-1899) による解題が貼り付けてある。これには確かに 1863 年にベルギーのアントワープにおける競売でクォーリッチ書店がクロフォード家のためにこの大文典を購入したと記されている。しかし、この解題にはクロフォード家本がラングレスの旧蔵本であるという言及はなく、またその他の伝来に関する言及もまったくみられない (註 1)。

土井博士が典拠とされたと考えられるラングレス蔵書売立目録 (Langrès:1825) の原文は以下の通りである。

1072.Arte da lingoa de Japam,composta pello P.Joao
Rodriguez.Nangasaqui,Coll.da Comp.de J.,1604,pet.
in-4,sur pap.de soie,v.vert gauf.,dent.,tr.dor.

このフランス語で書かれた大文典に関する書誌紹介では、
出品番号 1072

書名 Arte da lingoa de Japam	日本大文典
著者名 P.Joao Rodriguez	J. ロドリゲス
出版地 Nangasaqui	長崎
出版元 Coll.da Comp.de.J	イエズス会コレジオ

とあり、年号 1604 の後に書かれている略解題は次のように解釈できるだろう。

- pet.in-4 : petit in-4 「小型の四つ折り」オリジナルを製本し直した時に小さくなったためとみられる。
- sur pap.de soie : sur papier de soie 「絹紙の上に」同書は雁皮紙を使用しているが、当

時フランスでは日本の薄様紙をこのように呼んだ（註2）。

- v.vert gauf : veau vert gaufre 「表紙は緑色の牛革で浮き彫り模様あり」
- dent : dentelle 「表紙の端にレース模様あり」
- tr.dor. : trenchés dorées 「小口と天地が金色が塗られている」

これらの特徴は、「絹紙の上に」ということ以外すべて、ボードレイアン本のみにあてはまるものばかりである。そして「絹紙の上に」は、「雁皮紙に印刷した」を表現しているとみられる。また、ラングレスがこれ以外にもう一部大文典を所蔵していたという記録は売立目録（Langrès1825）には見られないので、クロフォード家本がラングレスの手沢本であったという証拠は、少なくともこの目録には全く存在しないといえる。

クロフォード家文庫の歴史に関して、クォーリッチ書店から出版された「クロフォード家文庫」の名を冠した *Bibliotheca Lindesiana* (Barker:1977) という本がある。これによれば、クロフォード家が 大文典を購入したベルギーのゲントで開かれた売立（1863）の売り手は、ヴァン・アルシュタイン男爵（Baron Pierre Léopold van Alstein）という人物であった。ヴァン・アルシュタイン男爵は、印欧語以外の言語に関する稀観本を蒐集していたことで知られ、1830年代にパリで行われたフランスを代表する東洋学者の蔵書売立において、多くの稀観書を購入していたという。

ヨーロッパにおける中国学を確立させたといわれるレミュザ（Abel Rémusat 1788-1832）が死去すると、彼と共にアジア協会（*Société Asiatique*）を設立したクラブロート（Julius Klapproth 1783-1835）とサン・マルタン（Saint-Martin）も 1830年代に相次いで世を去った。そして彼らが蒐集していた東洋関係の貴重な書籍は、パリにおいて行われた没後の蔵書売立を通じ、広く欧州の収集家や図書館に広がることとなった。

レミュザの次世代に属するフランスの東洋学者バジェスやジュリアン（Stanislas Julien 1817-1873）とも交流のあった第25代クロフォード伯爵（Alexander William Lindsay 1812-1880）（註3）は、1863年のゲントにおける売立に並々ならぬ意欲を抱き、クォーリッチ書店を仲介させて大文典を 1050 フランで落札させたのを初めとして、中国やエジプト、さらにイスラム関係の多くの稀観書を購入した（210-213:Barker1977）。

しかし Barker（1977）は、クロフォード家が購入した大文典が誰の旧蔵本であったかは記していない（註4）。

それで筆者は、大英図書館にあるサン・マルタン（Saint-Martin:1832）、レミュザ（Rémusat:1833）とクラブロート（Klapproth:1839）のそれぞれの蔵書売立の目録を調べてみた。ところが意外なことに大文典（1604）は、この三人の売立目録のどこにも記載されていない（註5）。彼らはそろって、ロドリゲスの小文典（1620）を仏訳した日本文典綱要（1825）とコリヤード日本文典（1632）は所蔵していたが、誰も大文典、小文典、日葡辞書のような、日本あるいはマカオで出版されたキリシタン版はまったく所蔵していなかったことが分かった。ちなみにラングレスの売立目録（Langrès1825）には、大文典（1604）の他に、コリヤード日本文典（1632）、日葡辞書（1603）、日西辞書（1630）、羅葡日辞書（1595）が記載されている。三橋健氏の書誌解説（513:大文典 1976）によれば

ば、このうち日葡辞書は現在、パリ国立図書館蔵で、羅葡日辞書はフランス学士院図書館蔵所蔵であるという。

ボードレイアン本は、ラングレスの署名もあり、ラングレス売立目録の記述と一致するので、間違いなくこれがラングレス旧蔵本とみられる。また内題の右上余白に、黒く消されてはいるが、おそらくどこかのイエズス会のコレジオの蔵書であることを示す書入（註 6）があることで、ヨーロッパのどこかのイエズス会に伝来した可能性が高い。

しかしながら現在のところクロフォード家本の伝来に関しては謎のままである。それを究明するためには、ヴァン・アルシュタイン男爵が参加したと思われる東洋学専門家の旧蔵本売り立て目録を 1830 年ぐらいから根気強く探せば、その手がかりは得られると考えられる。

（3）クロフォード家本の書入について

ボードレイアン本の本文には全く書入がない。影印本（大文典 1976）でも確認できるように、同本の遊び紙にはラングレスの署名を初めとする様々な書入がある。そして内題の右上に黒く消された旧蔵者名とみられる書入があるが、それ以降本文には全く書入がない。影印本では下線を引いたか、印をつけたように見える部分があるが、今回閲覧してすべて書入ではなく、印刷の際にできたものと確認出来た。

クロフォード家本の本文には、筆者が確認したところで、ペン書きによる 39 箇所の書入がある。それらは複数の人物による筆跡ではなく、ある一人の人物が大文典を精読した際に余白に書き込んだものとみられる。土井博士によるとロドリゲス自身の筆跡とは異なるとのことである（78-79:土井 1982）。さらに土井博士は「付、クロフォード家本書入抄」として 30 箇所（大文典 3 丁所載の存在動詞のポルトガル語訳を加えれば 31 箇所）を参考とすべきものとして挙げられた（87-89:土井 1982）。

筆者は、クロフォード家本を閲覧して、土井博士が指摘された書入をすべて確認することが出来たが、土井博士が挙げられなかった書入も 8 箇所発見した。それらを*で示し、「クロフォード家本書入表」（87-89:土井 1982）をもとに【表】を作成した。

範疇 I ～ V は土井博士が設定したもので、VI ～ IX は筆者が付け加えた。太字が書入の対象となった大文典の本文で、普通の文字がクロフォード家本にみられるペン字による書入である。

なおパジェス写本には黒色と朱色の二種類のペン字による書入がある。そして、クロフォード家本の書入を、漢字を省くなど不完全ながら、朱色のペン書きで記録しようとして試みている（註 7）。【表】ではパジェス写本に朱色のペン書きで記録されていない書入を〔 〕で示す。

【表】クロフォード家本にある書入

I. 日本語の語形や例文に補訂を加えたもの

丁行	本文	書入	
(1) 9,15	cocorouo	cocoroaruuo	
(2) *21v,24-25	xitagaini	xitagai	
(3) 28v.,23	xunda...musunda	xūda,mufūda	[パジェス写本になし]
(4) 55,19	Xūsocu	Xôsocu	
(5) 67v.,26,28	Vareraga	Vareraga 抹消	[パジェス写本になし]
(6) 76v.,19	Vonaju	Vonajicu.it' (item)	
(7) 103,27	yamaye	yamayeu	
(8) ,28	fudeua	fudedeuu.Cono fudeua cakenu,i.não escreue esta pena.	
(9) ,29	Xiroyori	Xiroyoria	
(10) 109v.,14	ayūde	ayōde	[パジェス写本になし]
(11) 151,1	quitta	quiranu	
(12) 154,1	Bandō.sa	Quantô sa	

II. 日本語の意義をラテン語で注記したもの

(1) 155,15	jeffi.i.Nefas	je fas.Fi.nefas	
(2) *159v,2	facana	piscis	[パジェス写本になし]
(3) 169,25	quiōdan	dialectus	[パジェス写本になし]
(4) 170,32	Quiōye...	excipe verbū iru.i.intrare.	
(5) 173,38	Sumito...	sumi.i.carbo,sumi.i.angulus	
(6) 173v.,1	Faxiuo...	faxi.i.paxilli qb.edútf(quibus eduntur)cibi.faxi.scale	
(7) *220,10	..., tem Rocuxacu gofun,	varias	
(8) 235,18	Nenrai	annales	[パジェス写本になし]

III. 日本語を写す漢字を示したもの

(1) 55,18	Xin,Sō,Guiō	caelú 天 (楷書) xin.caelú 天 (行書) sō.caelú 天 (草書) ghiō
(2) 130v.,32	Mata	又
(3) ,35	Momata	亦
(4) 151,5	propria letra	之 no
(5) ,8	coreuo	進 xinji 之 coreuo 候 soro (「進之」に返点を付す)
(6) 159,6	Go,L,guio	御 guio.go.von.vo.mi. [パジェス写本になし]
(7) 180v.,9.10	Yuqui,...	行 yuq. 尽 tzucusu.江 cō 南 nanno 数 su 十 git 程 tei 曉 kiō 風 fū 残 zan 月 ghet 入 iru 華 qua 晴 xeini (「入華晴」返点を付す) [パジェス写本になし]

IV.日本語のローマ字綴を訂正したもの

- | | | | |
|--------------|-------------|-----------|--------------------|
| (1) 95,14 | Gue | Ghe | [パジェス写本になし] |
| (2) 158v.,14 | GVIO | Lege Ghio | [パジェス写本になし] |
| (3) *160v,35 | DONO | DOMO | [パジェス写本では本文が DOMO] |
| (4) 174,25 | Quiõ | Kiõ | |
| (5) *218,37 | Ieni | geni | [パジェス写本になし] |

V.他の関連箇所を参照丁数を示したもの

- | | | | |
|--------------|------------------|--------------------|-------------|
| (1) 78,14 | Do ARTIGO | Vide 137.b.et 149. | [パジェス写本になし] |
| (2) 135,12 | Ca | pag.89. | [パジェス写本になし] |
| (3) 137v.,27 | tratado | Vide 149. | [パジェス写本になし] |

VI.印刷された文字をペンでなぞったもの

- | | | | |
|------------|---------------|--------|-------------|
| (1) *73.35 | Nomeyo | Nomeyo | [パジェス写本になし] |
|------------|---------------|--------|-------------|

VII.丁数を書き加えたもの

- (1) ***LIVRO SEGVNDO...**第二巻の巻頭の右上に 81,82,83 とある。[パジェス写本になし]

VIII.大文典のポルトガル語を訂正したもの

- | | | |
|-------------|----------------|-----------|
| (1) *103,26 | fe pode | fe podera |
|-------------|----------------|-----------|

IX.ポルトガル語訳を加えたもの (idβ は idem と同意味で「上と同じ」と考えられる)

- | | | |
|------------|-------------------------------------|-----------------------------------|
| (1) 3,3~19 | Aru. sou. | Nitearu sou. |
| | Vogiaru. sou.l.estou | De aru. idβ |
| | Yru. estou | De vogiaru idβ |
| | Goزارu sou.l.estou | Nite goزارu idβ |
| | Naru. | De voriaru idβ |
| | Maximasu. es,he.l.estas,esta | Nite maximasu idβ |
| | Voaximasu idβ | Nite vouaximasu idβ |
| | Voriaru idβ | Denai n'est |
| | Nai. nã Estar] | De vorinai idβ Ser. |
| | Vorinai. nã Auer] | De gozanai. idβ |
| | Gozanai. idβ | De sörõ,l,soro. est sou |
| | Saburõ. sou | De so. idβ |
| | Fanberu. idβ | Vataraxe tamõ. idβ |
| | Nari, defectiuo. hé | Imafo cariqueru. |
| | sörõ,l,soro. idβ | Masu.i.Maximasu. |
| | Sõ. idβ | Arazu, defectiuo. n'he |

VII (1) で丁数 (81,82,83) を第二巻の巻頭に書き加えたのは、大文典の丁付けに欠落があるからである。これら書入を加えた人物は、ポルトガル語、ラテン語、日本語（ローマ字と漢字）で書き込んでいることで、ラテン語と日本語の素養を持ったポルトガル語話者であった可能性が高い。また III. (7) ではローマ字で引用された漢詩の一部に、一二点を加えた漢字の書入を残しているのは、この人物の手元にもロドリゲスが典拠とした漢詩集があったためではないだろうか。

ところでパジェス写本にみられるクロフォード家本の書入に対して土井博士は以下のように解説している（土井 79:1982）。

底本の書入も、日本語に対する訂正や補注の類は忠実に写し取り、ただ漢字については、最初に見える「天」の真草行三体は模写したが、思うに任せないためか、以下は断念している。

しかしながら、【表】にあるように、クロフォード家本に漢字以外でなされた書入のなかにおいても、パジェス写本に朱色のペン書きで書写されていないものが少なくない。

さらに興味深いのは【表】IV (3) で、クロフォード家本では本文にある DONO に対する注記であった DOMO をパジェス写本では本文に採用し、これがクロフォード家本の注記であったことは示されていない。また、クロフォード家本にある「別の頁を参照せよ」という注記（【表】V）は、パジェス写本ではすべて省略されている。したがってパジェス写本は、クロフォード家本にある書入をすべて正確に記録する意図はなかったと考えられる。

(4) おわりに

筆者は、多くのキリシタン版が現存することに関して、パジェスも含め、ラングレスから始まりレミュザ、ジュリアンへと続く 19 世紀フランスの東洋学の開拓者たちに、感謝しなければいけないと強く感じた。彼らがヨーロッパでいち早く日本語研究におけるキリシタン資料の重要性を認識し、それらの蒐集活動の端緒をつくった。またクロフォード伯爵家のような貴重本の蒐集家にその価値を喧伝してくれたおかげで、散逸を免れたキリシタン版は少なくなかったと思われる。

最後になりましたが、貴重な資料の閲覧を快く許して下さった第 29 代クロフォード伯爵と土井洋一先生に深く御礼を申し上げます。

〔註〕

註 1：クロフォード家本の巻末の遊び紙に貼られたによる解題のなかでバーナード・クォーリッチは、大文典は真に稀覯本であるが、彼が知る限りもう一部だけ、緑色の牛革表紙を持つラングレス旧蔵本があると記す。そしてそれはラングレスから Heber コレクションに渡り、再び 1836

年にパリにおいて売却されたことを述べ、クォーリッチ自身、現在の所有者を知らないと記している（以下に引用）。これはラングレス旧蔵大文典が 1827 年にオックスフォード大学ボードレイアン図書館に移ったという定説（513:大文典 1976）と矛盾する。この解題に日付はないが、1863 年のゲントにおける売立以降に書かれたことは確かなので、クォーリッチのような当時の古書取引の第一人者が、ボードレイアン図書館にラングレス旧蔵大文典が所蔵されていたのならば、そのことを知らなかったことがあるだろうか。クォーリッチの見落としかもしれないが、ボードレイアン図書館がいつ大文典を購入したかを調査してみる必要があるだろう。

The rarity of the original work is so great that besides the above copy I can only trace another which belonged to Langrès, bound in green calf. It passed from the Langrès collection into that of Heber, and was again sold in Paris in 1836 but its present owner is unknown to me. (Bernard Quaritch による解題から抜粋)

註 2：高田時雄教授（京都大学人文科学研究所）のご教示による。

註 3：ラウレス師は『吉利支丹文庫』（Laures:1957 [1940]）において、クロフォード伯爵（Earl of Crawford）とリンゼイ卿（Lord Lindsay）が別人であり、それぞれ大文典を蔵しているかのように記している。しかしこれらは同一人物を指すのでクロフォード伯爵とリンゼイ卿が別々に大文典を所蔵していたのではない。

註 4：筆者は Bibliotheca Lindesiana (Barker 1977) の著者 Barker 氏に問い合わせたが、氏はヴァン・アルシュタイン男爵がどこから大文典を入手したかに関しては把握していないとのことであった。

註 5：筆者はロンドンのクォーリッチ本店にあるアーカイブに 1863 年のゲントにおける売立目録がないかと問い合わせたが、見つからないとの返事を頂いた。

註 6：アーネスト・サトウ (47: Satow 1888) はボードレイアン本を Colleg. Paris. Soc. Jefu. (イエズス会 コレジオ・パリ) 旧蔵とはっきり記している。しかし筆者がこの書入からかろうじて判読できたのは、末尾の Soc. Jefu だけであった。

註 7：パジェス写本 (Pagès 1864) には、クロフォード家本にある書入を反映した朱色の書入以外に、黒色のペンによる書入がある。これら黒色の書入は Pagès か、またはこの写本によって日本語を学習しようとした他の人物によってなされたものと考えられる。それらには本文の単語に相当する漢字の書入に加えて、フランス語による注記もみられる。例えば、パジェス写本では、大文典 (179:1604) の発声法を論じた部分で、Xin (唇)、Cuchibiru (唇)、Iet (舌)、Vocuba (奥歯)、Mayeba (前歯)、Cô (咽)、fambun (半分) という様に漢字が括弧の中に示されている。そして「白歯」を意味したポルトガル語 dentes queixais にはフランス語に翻訳した (molaires) の注記がある。

[参考文献]

日本大文典 (1604) : Padre Joam Rodriguez. Arte da lingoa de Iapam... (Nangasaqui 1604)

：①クロフォード家本（クロフォード伯爵家蔵）

：②ボードレイアン本（Oxford 大学 Bodleian Library 請求番号 Arch.B.d.14）

：③パジェス写本（土井洋一先生蔵）(Pagès 1864)

日本大文典 (1976) : ロドリゲス著『日本大文典』[1604] 影印本。解題：土井忠生。書誌 解説：

三橋健. 勉誠社 1976

日本小文典 (1620) : Padre Joam Rodriguez.Arte Breve da Lingoa Iapoa... (Manila 1620) ロンドン大学
オリエント・アフリカ研究所 (S.O.A.S.) 蔵

日本文典綱要 (1825) : Éléments de la Grammaire Japonaise par le P.Rodriguez trad.du Portugais par
M.C.Landresse.Paris 1825

土井 (1982) : 土井忠生『吉利支丹論攷』三省堂 1982

Barker(1977) :Barker,Nicolas.BIBLIOTHECA LINDESIANA The lives and collections of Alexander
William,25th Earl of Crawford and 8th Earl of Balcarres,and James Ludovic,26th Earl of Crawford
and 9th Earl of Balcarres. Bernard Quaritch 1977

Langrès(1825) :Catalogue des livres imprimés et manuscrits composant la bibliothèque de Feu M.Louis
Mathieu Langrès.Paris 1825

Saint-Martin(1832) :Catalogue des livres imprimés et manuscrits composant la bibliothèque de Feu
M.Saint-Martin.Paris 1832

Rémusat(1833) :Catalogue des livres imprimés et manuscrits composant la bibliothèque de Feu
M.Abel-Rémusat.Paris 1833

Klaproth(1839) :Catalogue des livres imprimés et manuscrits et des ouvrages
Chinois,Tartares,Japonais,etc.,composant la bibliothèque de Feu M.Klaproth Paris 1839

Laures(1957) : Laures Johannes S.J.『吉利支丹文庫』Kirishitan Bunko Sophia University.Tokyo 1957
〔1940〕

Satow(1888) : E.M.Satow.The Jesuit Mission Press in Japan 1591-1610 Privately Printed 1888.

(おがはら としお・本学大学院文学研究科博士後期課程)